巻頭言

比較日本学教育研究センター長
古　瀬　奈津子

2011年度についてふり返る前に、2011年３月11日の東日本大震災のことを、まずは述べさせていただきたいと思います。被災者の皆さまには心よりお見舞い申し上げます。私たちのセンターでは人にも建物にも幸い大きな被害はありませんでした。しかし、センター室は人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟５階にあるため、コピー機や戸棚が動くなどの被害がありました。センターの先生方や客員研究員の方たちの中には何時間もかけて歩いて帰宅された方や、帰宅できずに大学で一夜を過ごした方もおられました。

３月11日以降、海外の交流協定校や国際日本学コンソーシアム参加校の先生方から、私たちの身を按じてくださるメールを何通もいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

大震災後、新年度を迎え、漸く通常の生活に戻りつつあった５月に、センターのプロジェクト担当者でもあった菅聡子先生が急逝されました。菅先生はご専門の日本近代文学を女性の視点から読み解かれ、海外の日本学研究者とも幅広い交流を行ってこられました。心よりご冥福をお祈りします。

このように2011年は本学および本センターにとって悲しいことから始まったのですが、７月には第13回国際日本学シンポジウム「感覚・文学・美術の国際日本学」を特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラム・科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）「身分感覚の比較史的研究」（研究代表者 岸本美緒）の支援により、無事開催することができました。２日目の「ファン・ゴッホと日本」については後日朝日新聞に記事が掲載されました。

第６回国際日本学コンソーシアムの方は、例年と異なり、11月にチェコのカレル大学において欧州社会基金の支援により、「日本文化における消費とコンシューマリズム」を共催で行いました。本センターからは各分野の教員４名、大学院生４名が参加しました。招聘してくださったカレル大学東アジア研究所に心より感謝申し上げます。

今年も本センターは特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラムをはじめ科学研究費や欧州社会基金の支援により活動することができました。厚く御礼申し上げます。来年度（2012年度）には、大学院GP時代から開講していた副専攻「日本文化論」も内容を再編して新たに出発することになりました。活動のための資金についても考えていかなくてはなりません。

今までの蓄積に依存しているだけでなく、国際日本学の新たな方向性を探っていく必要があると思います。みなさまにはこれまで以上のご支援をお願い申し上げます。

2012年３月